

Instructional Roundsによる現職院生の学びの特徴 ：教職大学院における実習科目としての成果と課題

Characteristics of teachers' learning through Instructional Rounds as a practicum at graduate school of teacher education

宮橋 小百合
MIYAHASHI Sayuri
(和歌山大学教育学部)

柏野 貴之
KASHINO Takayuki
(和歌山大学教育学部)

受理日 令和5年11月15日

抄録：著者らは、和歌山県内に協力校を得て、Instructional Rounds（以下、IRと略す）のシステムを用いて学校間で連携した授業研究を行うことで小規模校化する地域で、学校が専門的な学習共同体として維持できるためのシステムづくりについて研究を行ってきた。本稿ではその研究のもう一つの目的である、調査協力者の教職大学院の現職院生が、IRを用いた授業研究の試行実施に関わることで得られる学びの質について明らかにすることを目的とした。有田川町の調査協力者との差異に注目して調査結果を分析し考察した結果、院生は授業者としての視点にとどまらず、学校全体を意識した視点をもって授業分析し、現任校の授業研究や学校の研究に課題意識をもち、従来実施している授業研究の手法や校内研修についての省察や見直しを行っていることが明らかとなった。

キーワード：Instructional Rounds、授業研究、教職大学院、現職院生、実習科目

はじめに

本稿は、City et al. (2011) によって開発されたIRのシステムを用いて、複数の学校間で連携した授業研究の実施を中心とした研究の一部である。学校が連携できるIRのシステムを用いれば、小規模校化してリソースが限られる地域でも現職教育の充実が図れ、専門的な学習共同体(Professional Learning Community)の維持に寄与できると考え、著者らは2020年から3年かけて和歌山県有田郡有田川町に協力校とともに研究を進めてきた(宮橋他2021、宮橋他2022)。その際、2018・2019年のIR試行では、参加した現職院生にも何らかの学びがあるという仮説を立て(廣瀬ら2020)、本研究ではIRの参加者として現職院生に協力を依頼してきた。COVID-19感染拡大の影響もあり予定より1年遅れたが、2021年度からは教職大学院の実習科目「先進校実習」の一部に本研究のIRを取り入れ、実習として所属する現職院生(1年生、8～10名程度)が参加することになった。

本稿では、調査協力者の教職大学院の現職院生が、IRを用いた授業研究の試行実施に関わることで得られる学びの質について明らかにすることを目的とす

る。IRを用いた授業研究では、ホスト校の研究テーマに沿った授業改善についてアドバイスする経験を積むことになる。単に授業研究の理論や実施方法を学ぶだけでなく、学校研究のテーマに沿った授業づくりのためのアドバイスや、そのための授業研究の手法・観念の学習を行うことができ、かつ複数校を循環するので、その経験を数回重ねることができる。

各校でのIR実施後に質問紙調査を実施し、有田川町の各校から参加しているメンバーと現職院生の回答を比較することで、院生の学びの特徴について分析した。

1. IRを用いた授業研究の特徴

IRには2つのシステムがあり、それは学校間をつなぐネットワークのレベルと、授業分析のレベルの2つのシステムである(廣瀬ら2019)。City et al. (2011)の取組みでは、学区全体の教育改善を目的とし、学区の教育委員会(administrator)を中心として学区内の複数の高校を3～4校に振り分け、互いに訪問して授業研究を行う研究であった。ホスト校になった1校に残りの3～4校の教員が訪問して、授業参観・分析を

行うシステムがネットワークレベルのシステムである。

また、授業を観察し、分析する手順もシステム化されている。本研究では、廣瀬・宮橋（2020）の調査で用いたハンドブックをもとに、①観察、②記録、③事実の確認（付箋の作成）、④分析（整理・分析）、⑤解釈（子どもの立場になって考えて推測）、⑥展望の提案、の手順の通りに進行している。

この2つのシステムのうち、City et al.（2011）と異なる点が2つある。第一に、ネットワークのレベルでは、有田川町教育委員会の許可は得ているが研究への参加には至らなかった点、第二に、学区全体の学校の参加にはいたらなかった点である。しかし協力校から1人ずつ参加者があり、学校間を訪問し合うシステムとしては機能させることができた。

授業分析のシステムについては、手順通りであった。調査協力者のほとんどは、各学校で実施してきた授業研究の手法に慣れているため、①観察や②記録に主観が入ることがある（廣瀬ら2015）。そのため、実施前には試行用のハンドブックを用いて①～⑥の手順を説明し、特に②記録では、Instructional Core と呼ばれる「教師、子ども、内容」の3点に関わる事実のみを記録するように注意を促している。

加えて、協力者の院生には、2021年から教職大学院の実習科目の一環として設定したことから、事前指導としてIRについて説明し、ビデオを用いて授業分析のシステムを試行した。また、有田川町の調査協力者5人と授業提供者7人には8月にキックオフミーティングを行い、その場でIRの概要や手順について説明した。

<p>1. 授業別に、記録を確認しよう (事実の確認) *授業別に付箋を貼る。</p>	<p>①学校の研究が目指していること(授業者の思いや意図、実践で追求したいこと)に関連する記録を、ワークシートから選び、付箋に書き起こそう。 付箋の内容が推測になっていないか? 評価的(価値判断的)になっていないか? ②グループ内で、ポスターに付箋を貼って、共有する。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block; margin-left: 20px;">加除修正しましょう</div>
<p>2. 分析しよう (整理・分析) *両方から付箋を取り出して1つにする。</p>	<p>①付箋を眺めて、つながりやパターンが存在していないかを考えよう。 ②つながりやパターンの付箋を、別紙にまとめよう。 ③つながりやパターンに、名前をつけよう(カテゴリー名をつくる)。</p>
<p>3. 子どもの立場になって考えて推測しよう (ここで初めて解釈)</p>	<p>①教員の言動と子どもたちの学習を繋げて考えましょう。 例)「もし自分が子どもであるとして、「分析」にて確認したパターンが与えられたとしたら、何を知り、何ができるようになるだろうか?」 ②教師の思いや意図、実践で追求したいことにとって、そのつながりやパターンは、重要(有効)かどうかを、考えましょう。</p>

図1. 説明に用いた「2018年度版 巡りあい学びあう授業研究のハンドブック」の一部

2. 調査協力者

2.1. 有田川町の協力校、協力者

2021年は有田川町の5小学校に協力してもらった。比較的中規模なX小学校(1学年3学級)、1学年2学級あるV小学校、1学年単学級の小規模校のW小学校とY小学校、複式学級を有する小規模校のZ小学校の5校であった。小規模校にとって、何度も担任する学級を空けて他校のIRに参加することは負担も大きい。ため、X小学校を中心として、X・V・Wの3校のラウンドと、X・Y・Zの3校のラウンドの2ラウンドの設定とした。

ラウンドのために、各校から1人ずつがIRメンバーとして校長によって選出された。メンバー5人のうち、g教諭、c教諭、d教諭、f教諭の4人は3校ずつ参加、X小学校のb教諭は4校のIRに参加した。また、授業者として各校から1～2人選出され、Xの1人とV・

Wの授業者を5年生担任に合わせて、教科も国語と揃え、一緒に教材研究ができるようにした。Xのもう1人とZの授業者を4年生担任で合わせて、教科を算数と揃え、こちらも一緒に教材研究ができるようにした。Y小学校の授業者は、2人とも6年生担任で、教科を算数に揃え、一緒に教材研究できるようにした。

表1. 調査協力校と参加メンバー

日にち	学校	ホスト校のIRメンバー	IRメンバー(他校)	授業者
11/12(金)	W	g	b・c	1人
11/16(火)	X	b	g・c・d・f	2人
11/18(木)	V	c	g・b	1人
11/19(金)	Y	d	F	2人
11/22(月)	Z	f	d・b	1人

2.2. 現職院生の協力者

和歌山大学教職大学院では、実習選択科目として1単位の「先進校実習」という科目を設置している。11月に実習期間を設け、先進的な実践を行っている学校や授業研究に参加することを目的としている。2021年から有田川町におけるIRは、実習の一部となった。

2021年度は、所属する現職院生1年生9人全員が「先進校実習」を履修しており、同意を得て調査協力者となった。院生は1人2校ずつ有田川町IRに参加することになった。

3. 調査方法

5校でIRを実施し、ホスト校の管理職と授業者に分析結果を報告した後に、その場で調査協力者に質問紙に回答してもらった。全部で34件の回答が得られた。質問紙調査の内容は以下の通りである。

【質問項目】

- Q1：どのポイント（①～⑥）が難しいと感じましたか（複数回答可）
（ポイント）①何に注目して観察する、②どのように書き記す、③記録を確認しよう（事実の確認）、④分析しよう（整理・分析）、⑤子どもの立場に

なって考えて推測しよう（解釈）、⑥展望

- Q2：なぜ、難しいと感じたのでしょうか？（自由記述）
- Q3：難しいと感じたポイントは、自分にとって、重要でしょうか？（自由記述）
- Q4：どのポイント（①～⑥）が重要であると感じましたか？（上記ポイントから選択・複数回答可）
- Q5：なぜ重要だと考えましたか？（自由記述）
- Q6：今回実施したA町でのIRによる授業研究に参加して、どのポイント（①～⑥）があなたの学びにつながりましたか？（上記ポイントから選択・複数回答可）
- Q7：どのようなことが学べたのでしょうか？それは明日からのあなたの教師生活にどのように生かせるのでしょうか？（自由記述）

4. 分析結果

4.1. 分析（1）5件法の回答結果

まず、質問紙調査のうち①～⑥のポイントを選択して回答するQ1、Q4、Q6について複数回答、全員の回答について整理した（表2）。

表2. 質問紙調査Q1、Q4、Q6の回答数

設問	内訳	①観察		②記録		③記録の確認		④整理・分析		⑤解釈		⑥展望	
		有	院	有	院	有	院	有	院	有	院	有	院
Q1		2	2	6	5	2	2	6	6	1	1	3	10
難しさ	計	4		11		4		12		2		13	
Q4		5	2	1	3	1	2	10	8	5	7	5	9
重要さ	計	7		4		3		18		12		14	
Q6		2	2	0	3	1	5	16	12	5	8	3	14
学び	計	4		3		6		28		13		17	

*内訳の「有」は有田川町メンバー、「院」は院生の回答数を示す。

難しさについて聞いた設問Q1では、「②どのように書き記す（記録）」を、「難しい」と選択した人が11件と多い。Q2の「難しいと思った理由」の自由記述を見ると、「ビデオ参観」だったために「音声聞き取りにくい」という環境面の内容と、「主題に沿った記録をピックアップすること」というIRの手法的な難しさの2種類が見られた。2021年度は、音声の聞き取り改善のため2校目のIR以降、ヘッドフォンを導入したが、それでもビデオ参観のため、「子どもの発言が聞き取りにくい」という回答もあった。これら2種類の難しさは5回目のIR後の質問紙の回答でも存在した。

次に、「⑤子どもの立場になって考えて推測しよう（解釈）」の回答に注目した。Q1の「難しさ」を聞いた設問では回答数は2と少ないが、Q4の「重要さ」と

Q6の「学びにつながったか」という設問では、回答数がそれぞれ12、13と増えている。「⑤子どもの立場になって考えて推測しよう（解釈）」は、参加者にとって難しさを感じないが、重要であり、彼らの学びにつながると考えられていることがわかる。

さらに、「④分析しよう（整理・分析）」と「⑥展望」は、Q1の「難しさ」、Q4の「重要さ」、Q6の「学びにつながった」と3問とも回答数が多い。そして、有田川町メンバーが最も多くQ6の「学びにつながった」と回答したのは「④分析しよう（整理・分析）」であった（回答数16）。院生は、「⑥展望」について、Q1難しいと感じたが（回答数10）、Q4重要であるとも感じており（回答数9）、最も多くQ6学びにつながったと回答している（回答数14）。

4.2. 分析 (2) KH Coder による記述分析

Q7の「学びになったこと」についての自由記述を、KH Coder (樋口 2017) を用いて分析した。「する」「できる」といった動詞Bと「ない」という否定助動詞を除いた頻出語の上位25は表3のようになった。分析では、「子ども」「子供」「子」の類義語はすべて「子ども」と集約してカウントした。

表 3. 頻出語と出現回数

抽出語	品詞	出現回数
授業	サ変名詞	27
思う	動詞	17
大切	形容動詞	17
研究	サ変名詞	15
子ども	名詞	13
感じる	動詞	11
分析	サ変名詞	11
先生	名詞	10
学ぶ	動詞	8
考える	動詞	8
教師	名詞	7
自分	名詞	7
課題	名詞	6
学校	名詞	6
生かす	動詞	6
現任教	名詞	5
ポイント	名詞	5

頻出語の「先生」と「教師」については、例えば「先生」は、「他の先生」や「違う市町村の先生方」などと使われており、「教師」は「教師の役割」「教師の手立て」などで、使われ方の意味合いが異なったため、同義語とせず別々にカウントした。

また、院生の記述と有田川町のメンバーの記述の違いを明らかにするため、対応分析を行った結果は図2の通りである。

原点(0.0)付近の「特徴のない、どこにでも出現する語」として集まっているのが、「教師」「対話」「子ども」「思う」といった語である。一方で、図の「A」の付近に表れている「発言」「仕方」「習熟」は有田川町のメンバーに特徴的な語と言える(樋口 2017)。他方、図の「院生」の付近に表れている「研究」「学ぶ」「学校」は原点から離れているため、院生に特徴的であったと読み取れる。この対応分析により原点から離れている語とそのテキストの内容を表4に整理した。所属の欄の「有」は有田川町メンバーで5人をランダムに1～5に割りふった。「院」は院生を示しており、こちらも9人を1～9と割りふった。IR回の欄は、5回中

何回目のIRかを示している。

5. 考察

本稿では、現職院生の学びの質について明らかにすることを目的としているため、有田川町のメンバーとの差異に注目して考察を行う。

5.1. 「展望」への着目

分析(1)で質問紙のQ6の「学びにつながった」の回答で、院生と有田川町メンバーでは違う傾向が見られた。院生は、Q6の回答(複数回答可)について、延べ18人のIR参加者のうち、14人が「⑥展望」を選択している(77.8%)。一方、有田川町メンバーは、Q6の回答(複数回答可)について、延べ16人のIR参加者のうち、3人のみ「⑥展望」を選択している(18.8%)。

分析(2)で示した表4の「研究」6にもあるように、「難しかった点でも書いたように、X小学校さんの研究のためになるような発言が、できるようになる必要があると感じました。」と記述されている。院生は「⑥展望」で提案する内容について、ホスト校の役に立ちたいという意識が「重要」や「学び」の回答とつながったのではないかと考えられる。

逆に、有田川町メンバーは分析され提案された「展望」の内容そのものに注目しており、それらの内容に学びがあると考えていると言える。この傾向は、分析(2)の図1の対応分析図からも読み取れる。表4の「発言」「場面」「習熟」などの語は、「まとめ方・テンポ・発言をひきだし、つなげていく」や「授業をする上で、テンポの重要性、習熟させることの大切さ」といった記述から出現しており、まさに「④整理・分析」の中で出てきた内容であった。有田川町メンバーの学びの特徴である。

5.2. 対応分析とその記述

院生はIRの手法や分析とその特徴に注目していることが読み取れる。分析(2)の対応分析図では、院生に特徴的な語として「学校」や「協議」が読み取れることもそれを裏付けている。特に、表4の「学校」という語は、「授業者、学校にとって必要なことに、焦点化して協議される」や「授業をきっかけに学校の研究についても話をしたい」や「学校として同じビジョンを持って取り組む」のように、授業者としての視点にとどまらず、学校全体を意識した視点から語られている記述が見られる。

また、「現任教」という語はすべて院生の記述として5回出現しており、現任校の授業研究や学校の研究に課題意識をもち、改善したい、経験を生かしたいという意識をもっていることを表している。

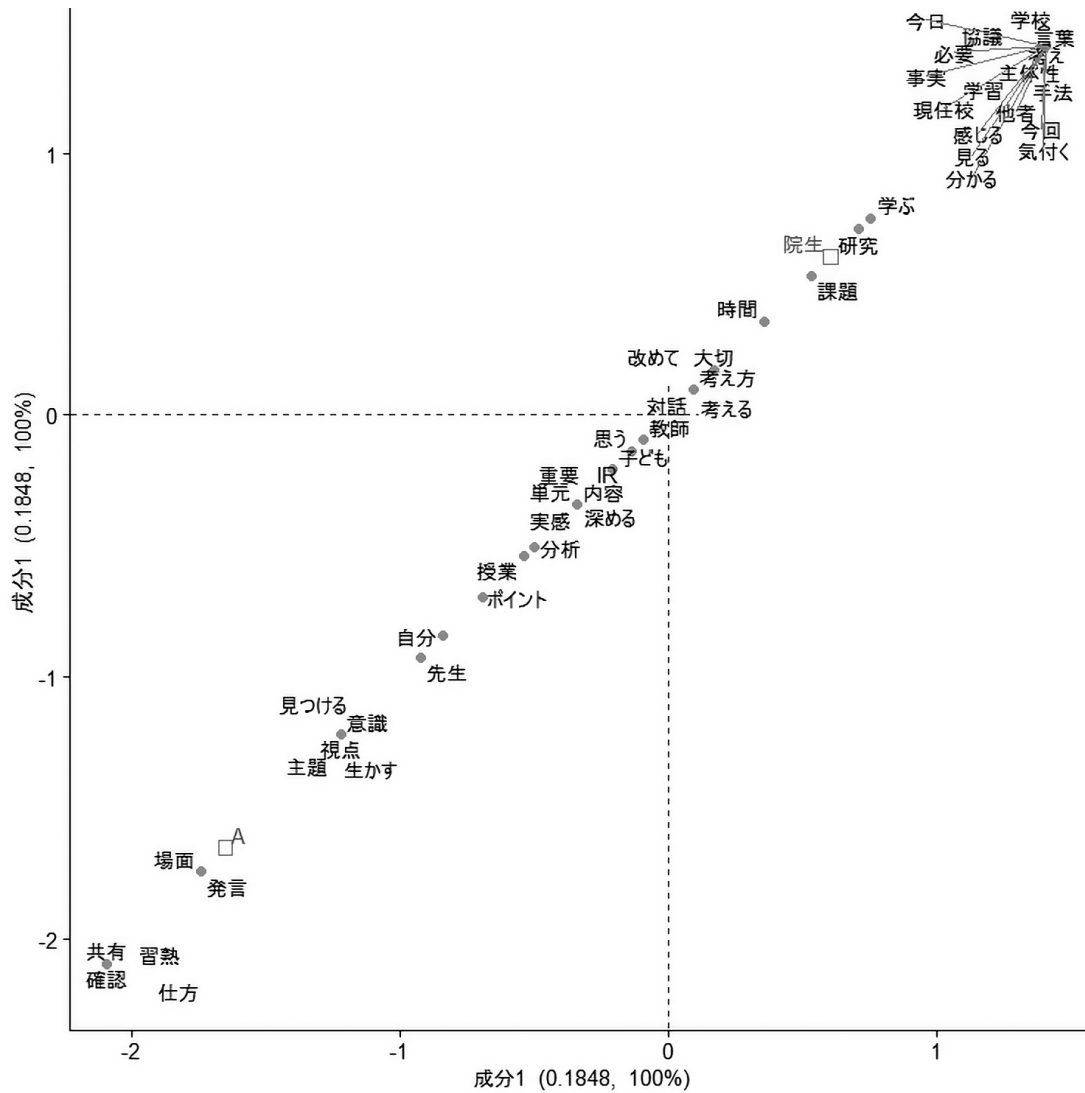


図2. 院生と有田川町(A)のメンバーの対応分析図

表 4. 対応分析で原点から離れている語とそのテキスト

語	所属 個票	IR 回	テキスト
発 言 (5)	有3	1	授業の作り方、 <u>発言</u> の仕方等、教師として基本的な事柄を確認できた。
	有4	2	まとめ方・テンポ、 <u>発言</u> をひきだし、つなげていくこと→明日からの授業の流れ組み立てで生かしていきたいです。
	有1	2	子ども同士の <u>発言</u> のつながりを大切にすること。
	院7	2	難しかった点でも書いたように、X小学校さんの研究のためになるような <u>発言</u> が、できるようになる必要があると感じました。それが、校内の研究にもつながると考えて <u>発言</u> する勉強にもなります。
仕 方 (3)	有3	1	授業の作り方、 <u>発言</u> の仕方等、教師として基本的な事柄を確認できた。
	有4	2	他の先生方が目をつけたところ分析の <u>仕方</u> が参考になった。分析したこと、有田川町の先生方と一緒に活動する機会をいただきたいことがこれからの教師生活に経験の1つとして生かせると思います。
	院9	5	事実を研究との関わりで見るとということがとても大切だと実感しました。この分析の <u>仕方</u> や展望の考え方を自校の研究や授分の研究でも取り入れてみたいです。
習 熟 (3)	有1	3	授業をする上で、テンポの重要性、 <u>習熟</u> させることの大切さ等、改めて実感しました。本校、職員とも共有し、指導力の向上に努めたいです。
	有3	3	既習事項の確認や <u>習熟</u> 方法について検討していきたい。
	院6	3	学習に向かっていることが分かったからだ。また、知識スキルも高めていくためには、 <u>習熟</u> の時間を確保することだと改めて感じた。

研 究 (15)	有4	5	これからの <u>研究</u> 主題にせまっていく新たな視点が学べた。授業づくりに生かせる。
	有1	3	IRによる、授業研究の機会を与えてくださり感謝しております。ありがとうございました。
	院3	1	今回事前にW小の <u>研究</u> の概要資料をいただき読んであったので、前回（練習）よりスムーズだった。
	院5	2	どんな時でも、自分の授業や参観した授業について（研究内容によっても見方は変わるが）分析することはあるので今回のIRとして学校の重点目標と次へつなげるための分析をしていこうと考えた。
	院6	2	今後の教育のあり方について研究を進めていくところで、今の子供たちにとって、他者とのかかわりの中で（後略）
	院7	2	難しかった点でも書いたように、X小学校さんの <u>研究</u> のためになるような発言が、できるようになる必要があると感じました。それが、校内の <u>研究</u> にもつながると思いました。考えて発言する勉強にもなります。
	院8	3	授業協議はどうしてもその先生一人の力量についての話し合いになってしまうことが多い。現任校の <u>研究</u> 授業でも授業をきっかけに学校の <u>研究</u> についても話をしたいと思うがなかなかできていない。
	院9	5	授業を記録し、事実を <u>研究</u> との関わりで見るとということがとても大切だと実感しました。この分析の仕方や展望ということがとても大切だと実感しました。この分析の仕方や展望の考え方を自校の <u>研究</u> や自分の <u>研究</u> でも取り入れてみたいです。
	院7	5	今日は、授業が、1本だったので、 <u>研究</u> 主題との関わりを見つけやすかった。
	院3	5	<u>研究</u> 主題をふまえ、「できていること」、「今後すると良いこと」という、授業者、学校で協議されるので、協議の深まりもあり、三方よし？だと感じた。同じように <u>研究</u> 協議に手法をとり入れてみたい。
学 ぶ (8)	有2	3	1時間の中での内容の精選や、中心となる <u>学び</u> をどう深めるか等、今後の授業づくりに生かしていきたいと思う。
	有2	5	考える場面、共有する場面、教える場面をつかい分けることで身につけさせることが大切であると <u>学んだ</u> 。
	院1	1	単元や授業で何を <u>学び</u> 、何を考えるのか、どう話し合うのかをどれだけ意識を高く持つことが必要かを <u>学びました</u> 。
	院4	1	発問の工夫→自然といろいろな考えが出る発問 など、対話が生まれるしかけが大切だと <u>学びました</u> 。W小学校は基礎・基本の定着をまず大事にされていて（後略）
	院8	3	話をしたいと思うがなかなかできていない。今回参加して協議の手法やポイントを <u>学んで</u> 、現任校でも活かしていきたい。
	院5	3	今回の授業内容だけでなく、今まで何を <u>学んだ</u> のか、次にどうつながるのかを理解した上で分析を行うことでより広いものが見えてくるのではないかと感じた。
	院9	4	授業を事実に基づいて分析するというのがとても大切なことだということを <u>学ぶ</u> ことができました。印象で議論するのではなく、事実をもとに話し合うことで課題の本質に気付くことができる。
院8	5	「焦点化」という言葉でも先生がたのイメージは多様であると感じる。それを学校として同じビジョンを持って取り組むという課題は現任校でいう「 <u>学び</u> 合い」の共有に近いものを感じる。学校現場は子供の課題は言いやすいが教師の手立てには指摘しにくいこともあるので、常に教師の手立ての是非に返るようにしたいと思う。	
事 実 (4)	院9	4	授業を事実に基づいて分析するというのがとても大切なことだということを <u>学ぶ</u> ことができました。印象で議論するのではなく、 <u>事実</u> をもとに話し合うことで、課題の本質に気付くことができると思います。
	院2	2	主観で話さないこと。子供の言葉や姿など、 <u>事実</u> から明らかになったことを大切にすること。
	院9	5	授業を記録し、 <u>事実</u> を <u>研究</u> との関わりで見るとということがとても大切だと実感しました。この分析の仕方や展望の考え方を自校の <u>研究</u> や授分の <u>研究</u> でも取り入れてみたいです。

* 語の欄の () 内の数字は、出現総数を示す。

6. 実践の評価

有田川町のメンバーとの違いに注目すると、院生の記述からはIRの特徴に関わって学びを得ていることがわかる。

6.1. 校内研究の見直しという視点

上述の「学校」という語の出現に見られるように、学校というより大きな視点からの分析にもかかわ

て、IRで学校の研修主題に沿って分析する経験から、ホスト校の研究や現任校の研究について省察していることが読み取れる。表4の「研究」の語が含まれる記述には、「今回のIRとして学校の重点目標と次へつなげるための分析をしていこう」（院生5:2回目）や「X小学校さんの研究のためになるような発言が、できるようになる必要があると感じました。それが、校内の研究にもつながると思いました。」（院生7:3回目）のように、授業の分析を学校研究の主題とつなげて考え

ることの重要性に気づいている。また「現任校の研究授業でも授業をきっかけに学校の研究についても話をしたいと思うがなかなかできていない。」(院生8:3回目)と現任校の状況について省察している。

そして、IRの分析の仕方や協議の手法について、「この分析の仕方や展望の考え方を自校の研究や自分の研究でも取り入れてみたい」(院生9:5回目)や、「今回参加して協議の手法やポイントを学んで、現任校でも活かしていきたい。」(院生8:3回目)、「同じように研究協議に手法を取り入れてみたい。」(院生3:5回目)のように、現任校に取り入れてみたいと記述している。

実際、院生9からは、2022年度に現任校でIRをやりたいという申し出があり、2022年10月に実施した。また、他の院生からも現任校の研究のためにIRをやりたいという申し出があり、今後も教職大学院の実習や授業の一環として継続的にIRを実施していけそうな動きが見られる。

6.2. 事実への注目

また、各校で従来から実施している授業研究の手法と比較し、校内研修の手法について省察や見直しのきっかけを提供していることがわかる。表4の「事実」という語は4回出現しているが、すべて院生によって記述されており、対応分析図でも院生の特徴的な語として出現している。

「主観で話さないこと。子供の言葉や姿など、事実から明らかになったことを大切にすること。」(院生2:2回目)や「印象で議論するのではなく、事実をもとに話し合うことで、課題の本質に気付くことができる」(院生9:4回目)といった記述には、主観的な分析にならないように、事実を根拠として話し合うことの重要性について認識していることがわかる。

これらの記述は、「先進校実習」として実際にIRを用いた授業研究を数回経験したことによって、事実を根拠にして分析することの意義について院生が実感し、学びと認識していることを表している。これらの学びは、大学院生として研究指導を受ける中で、事実やデータの客観性や、根拠となるデータの信頼性について、意識が高くなっていることが一因だと考えられる。この意味において、大学院での研究指導の成果を、実践分析に移す機会となっており、実習科目として理論と実践の往還を実現していると言える。

6.3. 調査協力者の共著者からのコメント

2021年から本研究に協力している共著者は、指導主事経験もあり、研究授業での助言経験も持つ大学院特任教授である。IRを用いた研究授業は、2021年に第一著者をきっかけに初めて知り、院生対象の事前指導の段階から参加し、共に5校のIRを回って研究を支援してきた。共著者には、本稿の調査結果を知らせる

前に、IR後に感想を記述してもらった。この文章化した感想をもとに、実践の評価の素材とする。

授業を考察する観点がこれまでとは大きく異なる授業研究方法に出会い、新しい視点が開けたというのが率直な感想である。

1単位時間でそれぞれ別の授業の前半と後半を記録するという方法について説明を受けた時、驚きとともに若干の違和感があった。なぜなら、授業というものは、はじめの挨拶から終わりの合図まで丸ごと観察し、各段階での子どもの様子を見とること、そして何より導入から展開、まとめに至るまでの流れをつかむことが大切であると考えた授業研究をしてきたからである。果たしてそれらがどうなるのか全く想像できなかった。

しかし、これらの懸念はIRを使つての協議を数回経験することで消えていった。研究テーマに沿って、2つの授業に共通して表れていることを見つけるといった具体的な活動を取り入れることで、最も大切にすべき「研究テーマと授業実践のつながり」に焦点化した話し合いができたと考える。

また、事実のみを記録する点からは、これまでの授業記録は、協議会での指導内容を意識するあまり、記録者のフィルターを通した軽重のあるものとなっていたことを再認識させられた。授業者の言動に対し心の中でコメントをつぶやきながらの主観的なものとなっていたのである。また、事後の研究協議は、客観的事実に基づいた学校全体の実践研究に対するものとなり、これまでの協議会は、指導者個人の力量を評価する場になっていたことも猛省させられた。さらに、前半部分を見ただけの授業の後半部分の展開の様子を後から聞いて、全く想像もしなかった展開になっていたことも新鮮な驚きであった。このように、このほぼ同時間に2つの授業を客観的に見て共通点を探り、可視化していくという方法はたくさんの示唆を与えてくれた。

この授業研究方法は、研究テーマの設定次第で、学校や地域を限定することなく教員の学び合いを促進するツールになりえることを確信した。多くの教員がこの方法を学び、ファシリテーター役を担えるようになれば、本県の授業研究がさらに進展すると考える。

(柏野貴之)

上述の院生の記述と同様に、共著者からのコメントからも、各校で従来から実施している授業研究の手法とIRを比較し、校内研修の手法について省察のきっかけを提供していることがわかる。

第一に、これまでの授業の参観の手法として「はじめの挨拶から終わりの合図まで丸ごと観察し、各段階での子どもの様子を見とる」、「何より導入から展開、

まとめに至るまでの流れをつかむ」と考えていたと述べられている。

第二に、これまでの授業記録の手法として「協議会での指導内容を意識するあまり、記録者のフィルターを通した軽重のあるものとなっていた」し、「授業者の言動に対し心の中でコメントをつぶやきながらの主観的なもの」であったと述べられている。

第三に、これまでの研究協議として「協議会は、指導者個人の力量を評価する場になっていた」とあり、「客観的事実に基づいた学校全体の実践研究に対するもの」になっていなかったことに「猛省」したと述べられている。

この3点は、院生の記述とも概ね一致している。その一方で、課題についても提起されている。コメントの後半には、「多くの教員がこの方法を学びファシリテーター役を担えるようになれば本県の授業研究がさらに進展する」とある。院生の記述にも、「進め方のポイントやファシリテーション力がわかり身に付いたらいいな」という指摘があり、大学院の実習科目としては、IRのファシリテーターの育成も視野に入れた事後指導等も考えていく必要がある。あるいは、大学院の実習科目に連携した選択授業等で、ファシリテーションについて扱うことができれば、現任校で実践してみたいという院生の希望にも沿うことが可能になる。大学院のカリキュラムにも関わる課題であるため、今後検討していきたい。

おわりに

以上のように、院生にとってIRに参加したことで得られた学びの特徴が明らかとなった。それは、第1点目に、ホスト校へ「展望」を示すための発言の重要性を認識していたこと、第2点目に、授業者としての視点にとどまらず、学校全体を意識した視点をもった授業分析ができていたこと、第3点目に、現任校の授業研究や学校の研究に課題意識をもち、改善したい、経験を生かしたいという意識をもっていたこと、第4点目に、従来実施している授業研究の手法や校内研修についての省察や見直しができていること、第5点目に、事実やデータの客観性や、根拠となるデータの信頼性について意識できていたことであった。

特に、第5点目の事実やデータの客観性や、根拠となるデータの信頼性についての意識は、大学院における研究指導での学びとの往還関係にあることが推測され、大学院の意図する実習科目として重要な学びであることが示唆される。

しかし、その一方で、「研究」や「事実」の語が記述されたのは、特定の院生にとどまっておらず、実習参加

者全員から抽出されていない。実習事後指導の見直しも含めて、院生の学びについて再度検討していく必要も明らかとなった。加えて、ファシリテーターの育成という観点では実習科目では不十分でもあることが課題として出された。「先進校実習」という科目内で実施できる内容も限られるため、今後、大学院のカリキュラム全体を見据えて、改善を検討していきたい。

加えて、本来のIRが意図するものとして、ネットワークの重要性への着目が院生の記述には少なかった点にも、注目すべきである。院生は、「学校」という視点で授業を分析できていたものの、学区や町内で互いに訪問し合うことの意義や学校同士をつなげてネットワーク化することの意義については実感が薄かった可能性もある。Teitel (2013) では、学校の外部者の参加やネットワーク構築の重要性が指摘されている。学校同士がつながり、ネットワーク化することによってIR参加者の学びがつながり、廣瀬 (2023) の指摘するような「集会的知恵 (Collective Wisdom)」として学校間で創造・蓄積されていくことの重要性について、院生の理解や実感を促す工夫についても今後追究していく。

引用資料

E. City, R. Elmore, S. Fiarman, & L. Teitel (2011) *Instructional rounds in education: a network approach to improving teaching and learning*. Harvard Education Press.

樋口耕一 (2017) 言語研究の分野における KH Coder 活用の可能性, 計量国語学 31 巻 1 号, pp.36-45.

廣瀬真琴・森久佳・宮橋小百合 (2019) *Instructional Rounds の日本における試行と評価*, 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 第 70 巻, pp.249-261.

廣瀬真琴・宮橋小百合 (2020) 学校間連携型授業研究ハンドブックの開発に関する基礎的研究, 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 第 70 巻, pp.249-261.

廣瀬真琴 (2023) 日本における School-Based Instructional Rounds のモデル開発に向けた基礎的研究, 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 第 74 巻, pp.207-219.

L. Teitel (2013) *School-based Instructional Rounds*. Harvard Education Press.

宮橋小百合他 (2022) 有田川町内における学校循環型授業研究の発展, 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書, pp.207-212.

宮橋小百合他 (2023) 有田川町内における学校循環型授業研究の継続的発展に向けて, 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書 2022, pp.162-166.

【謝辞】 本研究は、JSPS 科研費 18K02338, 20K02856 の助成を受けた。